

まちづくりにおける藤子・F・不二雄と そのキャラクター活用に関する考察と提案

Consideration and a proposal for bringing Fujiko "F" Fujio and his production into a town planning.

- 沖 和宏 / 富山大学芸術文化学部
OKI Kazuhiro / The Faculty of Art and Design, University of Toyama
- Key Words : area study, city planning, brand of characters

1. はじめに

平成18(’06)年10月、高岡市おとぎの森公園に漫画『ドラえもん』の主要キャラクター像6体が、高岡市商工会議所創立110周年記念事業企画として設置された。高岡市は故藤子・F・不二雄氏こと藤本弘氏（以下、F氏）生誕の地であり、氏が藤子不二雄[Ⓐ]氏こと安孫子素雄氏と出会った場所、つまり藤子不二雄誕生の地とされている。またキャラクター像製作は、伝統工芸高岡銅器振興協同組合によって行われ、地場の銅器技術が随所に生かされている。加えて設置場所となったおとぎの森公園は、長年にわたり漫画家・藤子不二雄の文化業績研究・普及活動を行ってきた市民団体「夢たかおか実行委員会」による2万人イベントの開催地であった。つまり冒頭の企画は、高岡市に潜在し、育まれてきた複数のリソースが、ひとつのテーマで結びついたまちづくり事業の好例といえるであろう。

しかし、今より数年前まで高岡市とF氏サイドとのビジネス・スタンスに大きな溝が存在する時代があった。本考察と提案は、まさにその“溝の時期”にあたる平成14年(’01)年に、F氏サイド（遺族および藤子プロ）との関係修復を念頭に置いた新しいプランを高岡市より依頼された際に、状況把握とコンセプト・メイキングのために行った調査結果と試案をまとめたものである。

2. 高岡市とF氏ならびにドラえもんと14年間

表1は高岡市広報統計課が編集する広報誌「市民と市政」に過去掲載されたF氏、もしくはF氏著によるキャラクターを用いた事業記録の一覧であり、その最古は平成6(’94)年7月と驚くほど近年である。

F氏《昭和62(’87)年までは[Ⓐ]氏との共同名義》の社会的評価を受賞を基準として捉えるならば、それは昭和38(’63)年の小学館漫画賞受賞に遡る。その後、『ド

表1 高岡市広報統計課が把握する過去のF氏および、F氏著作キャラクターに関連した事業一覧

			備考		
			昭和56年 川崎市文化賞受賞		
			平成元年 ふるさと 創生事業スタート		
約10年	約6年	完成・実施年度など	事業名	主催/場所	
		平成6年7月	万葉の杜 ドラえもんの散歩道完成	御旅屋セリオ	
	約3年	平成9年2月	藤子漫画コーナー設置	高岡市/中央図書館(旧地)	平成9年9月 逝去
		平成10年8月13日~31日	藤子・F・不二雄の世界展開催	高岡市/美術館	
	約5年	平成11年12月1日~	藤子・F・不二雄コーナー開設	高岡市/中央図書館(旧地)	平成11年 藤子プロ、川崎市 に対して原画等の 寄贈を決定。以後 記念ミュージアム 構想が現在進行中
		平成16年7月10日~9月3日	THEドラえもん展	高岡市/美術館	
		平成17年4月~	広報誌「市民と市政」にドラえもんキャラクター使用	高岡市	
		平成17年4月~	母子健康手帳にドラえもんキャラクター使用	高岡市	
		平成17年4月29日~5月8日	ドラえもん親子1日フリーきっぷ	万葉線(株)	
		平成18年7月~9月	ドラえもん親子1日フリーきっぷ	万葉線(株)	
		平成18年9月	ショウワノート倉庫壁面にドラえもんキャラクター使用	ショウワノート(株)	
		平成18年10月11日	おとぎの森公園にドラえもん他全6キャラクター像設置	高岡商工会議所	
		平成19年1月13日~14日	高岡なべ祭りにコロ助キャラクター使用	高岡市	

『ドラえもん』が日本漫画家協会優秀賞を受賞したのが昭和48(73)年、同作品が2度目のTVアニメーションとなり、その単行本が1,500万部を突破したのが昭和54(79)年。同作品の第1回長編劇場映画が公開されたのが昭和55(80)年。翌昭和56(81)年の時点で、F氏の墳墓の地となった神奈川県川崎市《昭和36(61)年より居住》は、同氏に川崎市文化賞を授与している。80年代を皮切りに、藤子不二雄(あるいはF氏)名義の作品がTVアニメーションや映画作品として頻繁かつ大量にソフト化され、昭和59(84)年に一回目の映画の日特別功労賞を受賞。同年に『ドラえもん』単行本が累積5000万部突破。平成元(89)年に二度目の映画特別功労賞とともに、興行成績優秀作品賞受賞。平成4(92)年、日本漫画家協会文部大臣賞を受賞し、その翌年、生まれ故郷である高岡市より平成6(94)年に竣工する「ドラえもんの散歩道」のアプローチがあったことになる。川崎市が文化賞を授与した年から10年以上後のことであった。

関係者の間では、この竣工式に『ドラえもん』の主要声優数名を伴って参列したF氏と、高岡市行政関係者との間に決定的な断絶を生じさせる出来事があったとされているが、公式にそれを証明するものは存在していない。しかしながら、平成6(94)年の初事業以降、図書館における藤子漫画コーナー設置や、美術館がパッケージ化された巡回展示を購入するといった事業はあったものの、それは著作権使用交渉や、出生地と郷土出身作家の関係を基にした事業交渉とは直接関係のない事であり、平成17(05)年の広報誌におけるキャラクター使用までの約10年間、F氏やそのキャラクターと直接関与のない期間が存在したことは事実である。

3. なぜ高岡市はF氏から目をそらしてきたのか？

高岡市とF氏の間を考えると、キーワードとなる事項のひとつが「漫画文化」である。

F氏にとっての高岡が、幼少から青春時代を過ごした思い出の地であることに間違いはないだろう。だが、社会的関係としての高岡市は、不遇時代やブレイク以前の中堅時代はもとより、ドラえもんによって作家的な成功を手にした頃や、藤子・F・不二雄ブランドとして多くの業績と権威ある受賞を重ねた80年代以降に於いても、遠い故郷のままであった。その原因はF氏が漫画家であったことが大きい。F氏は漫画文化不遇の時代を自選集の後書きでこう記している。

「(前略)昭和二十六年「天使の玉ちゃん」毎日小学生新聞連載でデビュー。二十九年上京。本式に活動を始めたわけですが、その頃の児童まんがを取巻く状況は、それは厳しいものでした。「俗悪まんが追放」が声高に叫

ばれていた時代です。マスコミに児童まんがについての記事がのれば、それは決して批判非難の物でした。「俗悪まんが(つまり児童まんがすべて)は暴力的であり、反道徳的で痴呆的で、放置すれば日本中の子供を汚染するであろう。」というのが共通した論旨でした。「当店にはまんがを置きません。」と広告したデパートがありました。選挙運動で空地にまんがを山積み火をかけた候補者もいました。(中略)まさに児童まんが受難の頃、渦中にあつたばかりにしてみれば、永遠に続くかとも思えた暗黒の時代でありました。それでもぼくらはまんがを描かずにはいられなかったのです。描き続けて良かったと思います。しかし……。

嵐は去り春が来ました。盛夏を迎え、その後ずーっと盛夏が続いています。漫画家は描きたい放題。読者は読み放題。まんがを目の敵とするお母さんもないではないが、それはまんがの内容よりも、子供たちの勉強時間を蚕食する存在への敵視です。今時まんが批判などしても、時代錯誤のオジンオパンが何言うかと冷笑されるのが落ちでしょう。昔を思えば百八十度の大転換です。(後略)」(引用1)

高岡地域の、特にF氏と同世代層の人々にとって、漫画とはご多分に漏れず「俗悪」なものであり、それを著す漫画家は、たとえ社会的に著名であったとしても認めるに値しない類の職業人であるといった認識が近年まで根強く残っていた。平成11(99)年に活動を開始した前述の市民団体「夢たかおか実行委員会」を主催する主要スタッフの年齢は現在、大凡30代～40代が占めており、それは昭和40～50(65～80)年代頃にF氏作品の洗礼をダイレクトに受けた世代である。つまりF氏が記すところの「盛夏」時代のフォロワーといえる。F氏が作家的ピークに達した1970年代～80年代に、行政の現場でイニシアチブをとっていたのは、まさに「漫画は俗悪である」「漫画は文化ではない」と主張する側の世代、要するにF氏の同世代層であった。F氏に対して郷土出身著名作家としてのアプローチが川崎市のそれよりも10年遅れる理由のひとつは大きくそこにある。

4. なぜ高岡市はF氏に着目したのか？

高岡市とF氏の間を考えると、キーワードとなるもうひとつの事項が「著作権使用料」である。

平成6(94)年の『ドラえもんの散歩道』事業によるアプローチのスタートは、「漫画」を文化と捉え、F氏の業績を讃えた上でのものではなかった。アプローチ開始の最大要因は、平成元(89)年のいわゆる「ふるさと創生1億円事業」が起爆剤となって以降継続する「まちづくり」ブームだとするのが自然である。しかも高岡

市はバブル崩壊後の平成5(’94)年頃から「まちづくり」において、即時的な効果が期待できる題材として、F氏へのアプローチを開始する。まちが求めたものは当然、『ドラえもん』というキャラクターがもつ巨大な大衆性と動員力と市場であり、しかし、その先に待ちかまえていたのが高額な著作権使用料と、ビジネスとしての交渉であった。「盛夏時代」フォロワーを数的に含まない当時のスタッフは、係る交渉で「郷土への無償の貢献」という理論を持ち出した。それは高岡に生まれ、育ち、まちづくり事業に参画するという社会的ポジションに就くことができたエリート・ネイティブ・スタッフにとっては、何の疑問もなく受け入れることの出来る“郷土愛”の理屈であり、地元出身であれば誰にでも有効な道理だという思いこみでもあった。

果たしてF氏にとってのそれは、漫画家人生40有余年の間、ずっとなしのつづてでありながら、バブルがはじけたとたんに手のひらを返して「財産(ドラえもん)権を分与しろ」「自分の生まれ故郷に貢献しろ」と搾取ってきた、見たこともない遠い親戚のようなものでしかなかった。

晩年のF氏が高岡市に描く心情が、決して好意的なものではなかったことは、関係者や熱心な研究者の間では周知のこととなっている。そのいわば愛憎相半ばする心情は、F氏の没後も、同郷であり辛酸をともにしてきた夫人の心にも脈々と受け継がれ、ひいては著作物の管理・運営を行う藤子プロの、高岡市に対するビジネスのスタンスにも大きく影を落とすこととなった。つまり表-1の「万葉の杜 ドラえもんの散歩道」事業から「広報誌へのドラえもんキャラクター使用」までの約10年間の疎遠ぶりは、その表出である。

5. 高岡市が過去に行ったアプローチ姿勢

ここまでの考察から、F氏と、氏の著作物に対し、故郷・高岡市が関わりをもとうとした場合、事実上、関係

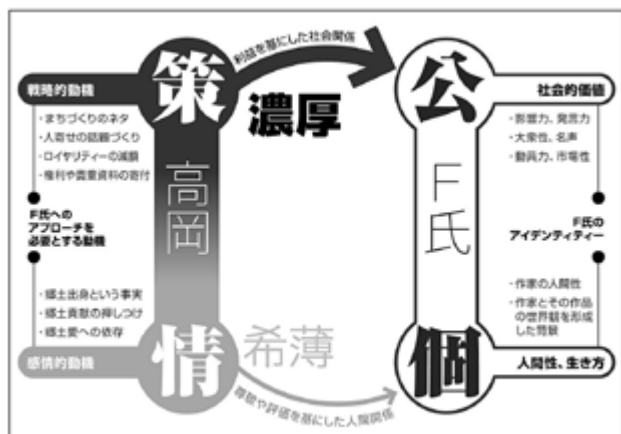


図1 両者の関係に溝を作ったアプローチの概略図

悪化を招いたアプローチ姿勢が明らかになる。

図1に記す構図が、少なくとも平成5(’93)年頃から平成14(’01)年の期間、行政側とF氏の間に関わられていた典型的なアプローチ姿勢であり、そのタブー部分は、要約すると以下の4点に代表される。

- a) ビジネス的な単なる利用(ただし著作権使用料を満額支払う予算があり、純粋にビジネスとしての交渉を行うならば問題はない)
- b) F氏の作家性や世界観、社会的存在価値を無視した、地域側の利潤だけを優先するプランの提案
- c) 故郷や地縁という起因性を基に、まちづくり・活性化のための利用を標榜するアプローチ
- d) F氏の縁(血縁や友人関係)を仲介した接近

6. 高岡市にとって理想的なアプローチ姿勢

F氏との関係を悪化させるアプローチ姿勢は、反転すれば氏の理想とする関係性、あるいは悪化した関係を修復するアプローチ姿勢へと変化する可能性がある。その一例が図2である。

6.1 施策面における動機とアプローチ姿勢

高岡市の施策的な動機は、漠然としたまちづくりビジョンや短絡的な活性化案(人が来るからテーマパーク、人気があるからドラえもんなど)に端を発したのではなく、具体的な人づくりや環境づくり、あるいは文化的意義の高い展開をベースに発生したプランである必要がある。この際、F氏へのアプローチは郷土出身者としての起因性よりも、あくまでも人間、ひいては作家としての評価に必然性の重心を置くこと。もちろん氏の表面的なステイタスやネームバリューにもあからさまにスポットを向けてはいけない。



図2 両者の関係を修復するアプローチ例の概略図

6.2 感情面における動機とアプローチ姿勢

F氏の人間性、作家性を理解し、愛着や尊敬の念をもつこと。幼年者を対象にした作品、成人を対象にした異色SF、社会的活動やその思想、氏が没頭した研究、嗜好した趣味など、どのような切り口でもよいから共感し尊重できるものをもつこと。それに基づいた動機づけは高岡市とF氏側との間に、より人間対人間（作者とファン、共通の夢を持つ同士など）としての関係をつくり、施策的アプローチに、説得力を与える。

7. 故郷・高岡市がF氏に見いだすべき価値

次に6. のアプローチ姿勢にのっとり、まちづくりの具体的な価値として、何をF氏から見いだすのかを考える段となる。

7.1 「生まれ故郷」という起因性の見直し

F氏はこれまで自著のあとがきなどで、高岡で育んだ体験や記憶が作家としての創造性や、作品に大きく反映されている旨のコメントを多数遺している。

「それでは何を頼りに子どもを描くか。結局、僕等は僕等自身を自作に登場させているのです。遠い少年の日の記憶を呼び起し、体験した事、考えた事、喜び悲しみ悩みなど…。それを核とし、肉づけし、外見だけを現代風に装わせて登場人物にしています。オバQも正ちゃんもゴジラも木佐くんも、みんな作者の分身です。中身は、昭和一ケタの人間たちなのです。」(引用2)

「ぼくの描く子どもたち、のび太にしても、スネ夫にしても、ジャイアン、しずかちゃんとか、みんなぼくの小さい頃の自分、及び、周辺の人物みたいなものがイメージにあってそれでかいているわけです。」(引用3)

「この巻に出てくる幻灯機はぼくらが子どものころつくったものです。オバQには、ぼくらの少年時代の遊びや空想を題材にした話がほかにもたくさんあります。木の上の家、有線放送、重力自動車、坂道鉄道などです。」(引用4)

「だいたいぼくは幼少の頃から、非日常的なものが好きで、小説やまんがでもトツピな話のものに夢中になった。」(引用5)

「ぼくは不思議なことが大好きです。空飛ぶ円盤とか、ネッシーとか、超能力とか……。

それで、そんな不思議なものがいっぱい出てくるまんがをかきたいなと思って“ドラえもん”を考えたのです。」(引用6)

F氏の世界を形成した背景については、このように、少年時代に得た体験と原風景がルーツになっていること

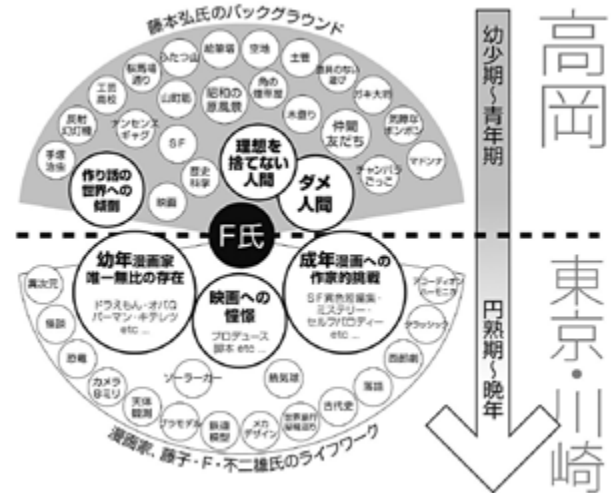


図3 F氏の作家性とその起源となる要素の経緯図

が見て取れる。それは友人同士の力関係や、両親や親族という最も身近な社会での喜憂入り交じった人間関係であり、山川や空地での触覚的な遊びであり、小説や映画、冒険活劇やSFといった作り話への没頭であり、その環境と体験の中での思春期の自己嫌悪や葛藤である。そしてその大凡が高岡でインプットされたものなのである。となれば、漫画家・藤子・F・不二雄の起源は高岡で発生し、それが東京トキワ荘や川崎市時代に作家として開花したという経緯に整理される。

つまり高岡市はF氏との関係性を単なる“生まれ故郷”という位置づけではなく、“作家F氏の諸元を産み出した場所”といった認識に変換すべきなのである。(図3参照)

7.2 F氏が孕む「まちづくり」価値の見直し

高岡時代のF氏が、端から見れば作り話や道楽に現を抜かず世間的には出来の悪い子供であったことを、氏本人はさまざまなメディアで述懐している。

「ま、のび太は、私自身なんです。具体的にいえば、スポーツが苦手とか、意志が弱くて、勉強しなければいけないのに遊んでばかりいて、夏休みも終わりにになると泣き出すとか、そういうところは、ぼくの体験そのものです。」(引用7)

しかしF氏はその時期に感受した知識や体験を、一貫してその後の作家活動の動力源にし続けた。

「多分、ほとんどのまんが家は、書くことに熱中する以前に、読むことに熱中する時代を経過しているはずで。そしてそれは、幼年期の読書体験（現在は、むしろテレビ体験？）に根ざしていると思うのです。

(中略)以後“奇妙奇天烈摩訶不思議”なストーリーを追いか求め、読みあさることになっただけでなく、今では書き続けることの原動力にまでなっているのです。」(引用8)

幼少時代、貪欲に吸収した創作寓話や映画、伝記物、落語などいわゆる「作り話の素晴らしさ」が、F氏の作家活動の源流となっていることは間違いない。氏が終生愛した数々の趣味やコレクション、そして漫画にとどまらない活動も全てこの時代の感化を基にしている。F氏のコメントによれば、のび太とは作者本人を投影した、なにをやってもテンポが遅れ、流れにのれないドジなキャラクターであるが、ポジティブな投影部分として、たとえばマイペースでも自分の目標を決してあきらめない人間であることが託されている。

「(前略)でも、ダメ人間を描くと、がぜん生き生きとしてくる。それはやっぱり、自分自身がのび太なんだということなんです。そのダメさが共感を呼ぶというのは、たいていの子どもたちの中にも、のび太が大勢いるからだと思うんです。その程度はさまざまでしょうがね。三〇%、二〇%、きっと一〇%くらいなのび太的部分もっている子というのは、もうざらにいますね。その部分に共感する子どもが愛読してくれているのだと思います。(中略)のび太の強さというのは、二〇年間かかって少しも向上していないにもかかわらず、なお自分の理想像というものは失っていないというところでしょうね。」(引用9)

F氏というのび太を、藤子・F・不二雄という大漫画家に孵化させた起源的要因が、幼少時代の体験と記憶であるならば、それは紛れもなく高岡で積み重ねられたものである。その知と体験がモチベーションとなって、F氏は幾多の創造的な作品と、厳しい漫画業界でのサバイバルを成し遂げたのである。

多くののび太達はユニークな人間、素晴らしい人材へと成長していく可能性をもっている。その先駆者がF氏である。ならばF氏を育んだ体験と記憶と環境こそ、F氏が孕む価値である。それを幼年層の大多数を占めるのび太的要素をもった子ども達に提供し、創造力と自発的な学習動機を育成するという目的こそが、エリート育成教育にマッチしない層を含めた教育全体の底上げであり、つまりそれは「まちづくり」へと繋がるのである。

8. 川崎市との差別化

平成11(’99)年、F氏の遺族と藤子プロは、長年居住

した川崎市に対して原画や遺品などの寄贈を条件に、記念館の建設・運営を依頼し、それは「藤子・F・不二雄ミュージアム構想(仮称)」として現在も計画が進められている。この一件は当時も今も高岡市にとって、事実上、F氏ゆかりの地は川崎市であるという公式発表を突きつけられたことに等しい大事件であった。少なからず行政側に「川崎市においしい資産を奪われた」といった意識が生まれ、一層F氏著のキャラクターや貴重資料依存に拍車をかけてしまうのも人情としては理解できる。

しかし、高岡市がF氏に見出す価値を「高岡での体験と記憶」「創造性を育み、維持する力」というキーワードで見直すならば、川崎市の一件は、あくまでF氏と高岡市の関係をより明確にする出来事と捉えることが可能である。それは、

- a) 高岡市——作家になる前のF氏が、創造性と創作の原動力を育んだ土地
- b) 川崎市——作家としてのF氏が、家族と共に長年にわたり居住した土地

という棲み分けである。

この考えに基づけば、作家・F氏としての遺品や記録(原画・キャラクター等)を川崎市が所有することは至極自然なグルーピングだといえる。対して、故郷・高岡市は、まだのび太であったF氏の遺産や記録を受け継ぐのが妥当ということになる。具体的な意匠にのみ囚われていると、この場合の遺産や記録は、氏の生家跡地であるとか、反射幻灯機といったものに帰結し、リソースに限界が生じる。ここで高岡市はいよいよF氏のキャラクター依存から脱却し、作家・藤子・F・不二雄を形成した本質部分、つまり“知と体験の遺産”を受け継ぐべきなのである(図4参照)。

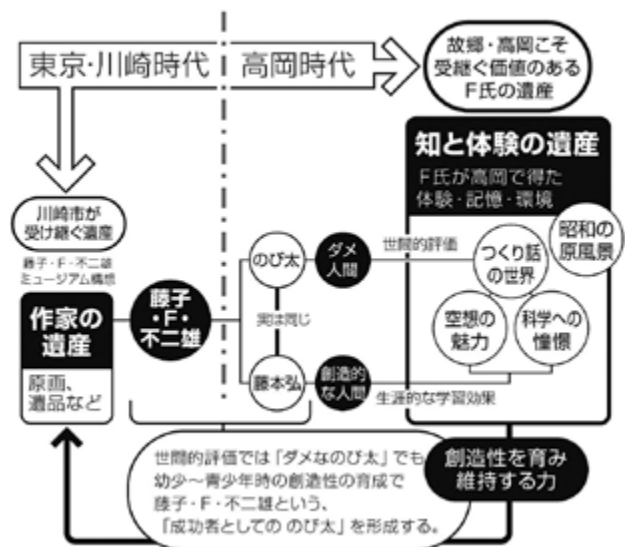


図4 F氏のまちづくりにおける価値と棲み分け

9. 「知と体験の遺産」を受け継ぐ具体的提案例

「提案：F文庫構想」

現在、高岡市生涯学習センターに移転した高岡市中央図書館には、平成9（'97）年に初めて設置され、その後、移転に際して現在のスタイルに整備された「藤子・F・不二雄コーナー」「ドラえもん・コーナー」があり、利用者の好評を得ている。コレクションの中にはマニアにとっては垂涎となる作品も含まれており、全国のF氏ファンも来訪している。

こうしたF氏の稀少図書のコレクション自体は、決して無意味なことではないが、氏のキャラクター依存から脱却していないことは否めない。「知と体験の遺産」を受け継ぐ場合は、F氏の著作そのものよりも、氏自身の作家的アイデンティティ確立の起因や、創作を続けていく上での糧となった図書類に着目した「F文庫」の設置を提案する。

例えば川崎市の自宅書斎や、F氏の仕事現場の図書や資料、あるいは高岡在住時に所有していた書籍類と同様のものを揃えるだけでも、その多様かつ広範囲に渡る分野と専門性は、図書としての資料価値が高いであろう。またそれらはF氏のバックグラウンドに直接関与する重要なアイテムでありながら、権利的な問題を一切発生させない。高額な著作権料を図書購入費にあてれば、相当数の蔵書が確保できるのではないだろうか。また氏の根本的な背景に根ざし、現代の子ども達に創作や科学への興味を増幅させるという目的は、高岡市がF氏の故郷である必然性に基づくアイデアとして、川崎市等との差別化が図れる。加えて、現存する藤子氏所蔵の書籍、雑誌類等のリストアップや、氏の歴史や思い出を踏まえた事項の分類、氏の人格や作家性形成と高岡時代における「知と体験」の具体的な関連性など、F氏のルーツを研究する面において、藤子プロや小学館といった管理・運営企業との利益の共有を図れる可能性も考えられる。

今一度まとめるならば、高岡市がF氏に見出すまちづくりの価値は、氏の創造を支えた「知と体験の遺産」、つまり高岡における氏の体験と記憶と環境そのものである。だからこそ円熟期～晩年を過ごした川崎市ではなく、幼少～青少年期を過ごした故郷・高岡市が、それを今に残す意義をもつとともに、F氏と故郷・高岡市との健全な関係を構築していく結果にも繋がり得るのだ。

謝辞

本稿の骨子と結論を決定づける上で、貴重な情報を提供して下さった「藤子不二雄を愛する会」「夢たかおか実行委員会」関係者の方々、リストを作成して下さった高岡市広報統計課、そしてこの考察の機会を与えて下さった高岡市に感謝します。

参考・引用文献

- 1) 藤子不二雄自選集10『パーマン』, 藤子不二雄著, 小学館刊, 昭和57年
- 2) 藤子不二雄自選集9『オバケのQ太郎2』, 藤子不二雄著, 小学館刊, 昭和57年
- 3, 7, 9) 藤子不二雄の世界 (p42～43), 発行人: 伊藤善章, 藤子プロ発行, 平成10年
- 4) オバケのQ太郎・第4巻, 藤子不二雄著, 虫プロ商事刊, 昭和44年
- 5) 月刊スーパーコミック・マガジン スーパーマン 第4号 寄稿『スーパーマンとパーマン』, マーベリック出版刊, 昭和53年
- 6) ドラえもん・第1巻, 藤子不二雄著, 小学館刊, 昭和49年
- 8) 藤子不二雄自選集1『ドラえもん SFの世界1』, 藤子不二雄著, 小学館刊, 昭和56年

参考文献

- 1) ドラえもん 第1巻, 藤子不二雄著, 小学館刊, 昭和49年
- 2) 小学生カメラ日記 寄稿『ぼくとカメラ』, アサヒカメラ編集部著, ナツメ社刊, 昭和54年
- 3) 藤子不二雄自選集8『オバケのQ太郎1』, 藤子不二雄著, 小学館刊, 昭和56年
- 4) 藤子不二雄自選集7『ドラえもん 夢と冒険の世界』, 藤子不二雄著, 小学館刊, 昭和57年
- 5) 愛蔵版 藤子・F・不二雄 SF全短篇 第1巻『カンビュセスの籤』まえばき, 藤子・F・不二雄著, 中央公論社刊, 昭和62年
- 6) 藤子不二雄ランドVOL.227『少年SF短篇2 創世日記』, 中央公論社刊, 平成元年
- 7) 愛蔵版 モジャ公, 藤子不二雄著, 中央公論社刊, 平成元年
- 8) 中央文庫コミック『T・Pぼん』第3巻, 藤子不二雄著, 中央公論社刊, 平成7年

参考資料

- 1) 報告書「(仮称) 藤子・F・不二雄アートワークス構想の経過」, 川崎市総合企画局, 平成18年
- 2) 高岡市広報統計課が把握する高岡市における藤子・F・不二雄関連事業リスト, 高岡市広報統計課, 平成19年